呆れた市長の姿勢

コロナ対策より駅前開発

コロナ禍により、経済的危機は殆どの業種にかつて経験したことのない大きな打撃となって現れている。しかも、リーマンショックや東日本大震災のような一過性のものではない。この先、コロナ禍は第2波、第3波が予想され、頼みとなるワクチン開発も困難を極め、開発の見通しは立っていない。長引くコロナ禍にどう対応すべきか、市民は先の見えない不安と困惑に包まれているが、豊岡三島市長はしゃにむに南口再開発に突き進んでいる。

このコロナ禍で進めるのか！

三島駅南口再開発事業は、このコロナ禍の吹き荒れる時期に本当に強引に進めるべき事業なのか大きな疑問だ。過去を振り返れば、小池前市長の時、突然のリーマンショックが襲い具体化していた南口再開発事業は一旦中止した。更に、東日本大震災でも、当時の豊岡市長は、業者撤退も有る中で開発を中止した。過去2回の出来事に比べ今回のコロナ禍での経済的打撃は例を見ない非常に深刻なものだ。

新築マンションの販売も前年比、半数近く落ち込んで、回復の見込みも無い。オリンピックも延期され、マンションは売れ残り、他都市の破綻した駅前再開発の二の舞の可能性がある。

コロナ禍で、豊岡市長の進める成長幻想は完全に破綻したと言える。多くの市民はこれまでの市の虚飾された説明に、「駅周辺が新しく成り、税収が増え、賑わいが増すなら良いんじゃないか」と考えて、開発を何となく支持していたのではないか？しかし、最早、今まで通りのやり方では立ち行かなくなった事は多くの市民は感づいている。正常な感覚なら一旦計画は断念し、事態の推移を見極めるというのが妥当な判断ではないか。

わき目も振らず突進む！

しかし、何故か豊岡市長はこのコロナ禍では立ち止まって事態の推移を見ることもせず、わき目も振らず開発だけを先へ先へと推し進めるありさまだ。11月には開発事業区域の都市計画決定を行うという流れで、「都市計画決定」がされると様々な規制がかかり、法的に後戻りできない状態になる。

三島市は計画を推し進めるにあたり、当初、3月に予定していた「東街区再開発事業の概要や都市計画の決定・変更に係る説明会」をコロナの影響で延期したのはたった7名の市民だけ、しかも、市長や幹部職員が現れる訳でもなく、1時間DVDを流して終わり。市民が居ようが居まいが、形さえ有り、やったという事が記録できれば、全てOKと言わんばかりの民主主義をないがしろにするような説明会だ。

6/25体育館、たった7名の参加者DVD説明会

市当局は手続き上、これで市民説明会は終了したとの呆れる姿勢だが、都合のいいところでコロナを出汁にして手抜き説明会を行い、一方で、先の6月議会では、コロナの「2波、3波は仮定の話だ！」として、コロナの心配など意に返さない答弁をしている。これほどご都合主義に打ち固められた市長は見たことが無い。こんなやり方で、総事業費200億円を超える開発がすすめられ、市民の血税が58億円も投入される。しかも、この事業に否定的な川勝県政との調整は殆ど出来ていないと聞く。県からの補助金も相当額が見込まれており、すんなり県の補助金が下りてくる補償はどこにもない。こんなずさんなやり方は、まさに、国民の信頼急落の安倍政権と同列にも見えて来る。

都市計画決定が11月

この後の、都市計画決定の流れは、7月13日～20日まで、市のホームページや市庁舎内、都市計画課で「都市計画の決定・変更（原案）の閲覧期間、7月27日には都市計画法に基づく「公聴会」を開催するが、どれ程の市民が集まり、迫力ある口述ができるか期待したい。この公聴会に参加し、計画への意見を述べるには、公述申出書を7月13日から20日までに提出しなければならない。

このまま計画を推し進め、貴重な血税58億円を投入すれば、2波、3波が来た時、悲惨な目に合うのは市民だという事を肝に銘じよう。

〈考〉

裸の王様

「続・夏は怪談」

夏は妖怪・怪談である（コロナ禍自体が怪談になりそうだが）。

高校教員渡り鳥であった私は70年代前半、西伊豆の土肥高校（現在伊豆総合高校土肥分校）にいた。

生徒の中に明らかにハーフかクオーターかと思われる女生徒がいた。茶髪で鼻筋の通った白人系なので、家系に外国人がいたのかと思ったが、白皮症（白子）ではないかと。茶髪も黒に染めさせてもあの程度なので特別許可しているとか（地毛かどうか何度も髪を洗わせたとか、ヒドイ話だがよくあった）。その種の知識はないが、いわゆるアルビノといった症状ではなくハーフとかクオーターといった自然体であった。本人は小さい頃はイジメられたと、早く船原峠を越えて都会で働きたいと言っていた。噂によると、海岸沿いにあるその集落では時たまそのような子が生まれるとか。私は隔世遺伝のようなもので、昔漂着した異国人の血が入っているのではないかとオカルト的妄想をした。

当時は心霊写真ブームで宜保愛子がテレビでもっともらしい解説をしていた。

ある時、男生徒が心霊写真と称する写真を持ち込んできた。写真部でA4に引き伸ばしたが聞き入れそうもなく、学校祭で展示したいというので彼女を巻き込むおそれを感じて、霊写真は見つけた者に祟るのだとか宜保愛子が言いそうなこと言って、どこかお寺でお焚き上げ供養した方がいいとすすめ展示をやめさせた。その後、もう一度写真を見せるように言ったら、お寺で焼いてもらったと。結構供養代がかかったと半分出させられた（助言は金がかかる・笑）。

高校教員渡り鳥であった私は70年代前半、西伊豆の土肥高校（現在伊豆総合高校土肥分校）にいた。

生徒の中に明らかにハーフかクオーターかと思われる女生徒がいた。茶髪で鼻筋の通った白人系なので、家系に外国人がいたのかと思ったが、白皮症（白子）ではないかと。茶髪も黒に染めさせてもあの程度なので特別許可しているとか（地毛かどうか何度も髪を洗わせたとか、ヒドイ話だがよくあった）。その種の知識はないが、いわゆるアルビノといった症状ではなくハーフとかクオーターといった自然体であった。本人は小さい頃はイジメられたと、早く船原峠を越えて都会で働きたいと言っていた。噂によると、海岸沿いにあるその集落では時たまそのような子が生まれるとか。私は隔世遺伝のようなもので、昔漂着した異国人の血が入っているのではないかとオカルト的妄想をした。

当時は心霊写真ブームで宜保愛子がテレビでもっともらしい解説をしていた。

ある時、男生徒が心霊写真と称する写真を持ち込んできたが聞き入れそうもなく、学校祭で展示したいというので彼女を巻き込むおそれを感じて、霊写真は見つけた者に祟るのだとか宜保愛子が言いそうなこと言って、どこかお寺でお焚き上げ供養した方がいいとすすめ展示をやめさせた。その後、もう一度写真を見せるように言ったら、お寺で焼いてもらったと。結構供養代がかかったと半分出させられた（助言は金がかかる・笑）。